



TITLE:

星座の美について

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 星座の美について. 天界 1943, 23(264): 193-197

ISSUE DATE:

1943-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168608>

RIGHT:

星座の美について

Über die Schönheit der Sternbilder.

山 本 一 清 Issei Yamamoto

神戸の長谷川一郎氏(天界260號, 64頁)が、ペガソス座の中に新しく十字形の配列を発見されて以來、あちらこちらの會員や讀者たちから、もつとほかの天空に、いろいろの“十字形”を言つてよこされるので、おかげで、自分も、晴れた夜など、只かうした各人からの思ひつきを批判するだけでなく、自らも何か新しい形を見付けたいと思つて、つい二三十分間、戸外に立ちつくすこともある。戦時下とは言へ、ホンの一時^{ひざき}を、かうして過すことの出来ることを、幸福に感じる。

“十字形”の暗示は、言ふまでもなく、かの南天に見える“十字架星座”の名が餘りに有名なからであつて、殊に大東亞戰の開始以來、南方へ往來する將士も其の他の一般人たちも、この星座を一言しない人は絶無であつて、あたかも“此等の人々は CRUX の星座を見るために、あちらへ往還するのでないか”と思はれる。新聞記事などを見ると、場所や時日の都合から考へて、決して十字架座が見えない筈であるのに、やはり、空に此の星々が燦然と輝いてゐるやうな文面があつたりして、思はず吹き出してすふ。これほど、十字架星座は南天の評判者である。實に、この大東亞圈の拓け行く時代の象徴は“十字架星座”であり、この星座が我々の皇民族^{さしな}を摩^さいて、南方經略を遂行させてゐるかの如く、感ぜしめられる。——自分自身も、1925年以來、紅海に於いて、インド洋に於いて、スマトラに於いて、ジャワ、バリあたりの島々に於いて、南米ペルーに於いて、又、幾度も々々々臺灣に於いて、この星座を見た。そして、幾たび見ても。見飽きない其の美しい印象を記憶し、時々プラネタリウムの圓蓋上に其の形を眺めて、古い記憶を呼び起してゐる。

まだ南方へ行つたことのない人々(これが、わが讀者中にも、大多數だらうと思ふが)は、この十字架の星座の實見談を人から聞いて(殊に、平常から星に興味を有つ人々は)、一種の羨やましさを感じるだらうが、それと同時に、我々の土地で見える北天にも、“十字形”の星象が皆無ではないだらうと思ひ直して、晴れた夜など、獨り戸外にたゝすみ、又は、星圖と天空とを熱心に見比べ、いろいろ考へつくし、遂に、前記の長谷川氏や、伊達氏(天界262號, 137頁)や、秋澤氏(本號第197頁)等の通信となつて、現はれたのではあるまいか?

尤も、星々の配列美は、十字形だけが価値高いのではない。カシオペヤのW形だつて、オリオンの“三つ星”だつて、又、ペガソスの四邊形や、獅子の鎌形だつて、見る人の心さへ出来ておれば、實に美しいのであつて、かの幾千年來の人類が見慣れてゐる北斗の七つ星なども、南米や濠洲あたりの人々が、こちらへ旅して来て、初めて之を見るとしたならば、大きい讚美をすることだらうと思はれる。

さて、主題を再び“十字形”の星象に戻すこととして、なるほど、長谷川氏や、伊達氏や、秋澤氏の如く、年中見える北天の星々にも、今後なほ大小の様々な十字形を見出す事は可能であらうし、更に、望遠鏡や双眼鏡の視野に於いて、熱心に新しい星野を捜したならば、幾らでも此うしたものを發見する可能性はあることだらう！と言つて、決して此れはけなすべきことではなく、むしろ之れは、星を趣味とする者の特技、乃至、特權として、人の知らない境地に喜びを楽しむ幸福の恵みを、大に誇つても、宜いものではあるまいか？ 自分なども、“双眼鏡的な美星座”の若干を、何時かは發表して見たいものだと、ひそかにもくろんでゐるのである。

さて、又、つい脱線し勝ちな筆の行き過ぎを警めて、元の“十字形”に歸らう。三四十年来、自分が見慣れてゐる星座の感じから言ふと、やつぱり何と言つても、自分はかのセンタウル座の南隣にある、古典的な“十字架”の星座が全天の最美形であつて、これに勝るものは無いと思ふ。勿論、これには自分の主観が多分に入つてゐるのであらうと思ふから、決して此の結論を普遍的の眞理として他人に押しつけるものではないのである。

支那の星座とギリシヤ傳來のトレミ星座などとを比べて、誰にも氣の付くことは、第一、トレミ星座乃至西洋星座がせいぜい百個内外であるのに對し、支那の方は三百を越える多數のものであるといふことである。従つて、全體的に見ると、支那の星座の個々の廣がりには比較的に小さいのであるに對し、西洋の星座には、大熊の如き、蛇使ひの如き、センタウルの如き、アルゴ船の如き、實に形の大きいものが多い。尤も、エリダン河だとか、ヒドラだとか、龍だとかの如き、形の長い星座は、長さと共に、大きさも、度を越えてゐるけれど、しかし、此等のものは、“長さ”といふものが一つの特徴なのであるから、自分は之を決して好ましくないとは思はない。人によつては、ヒドラのあののべらぼうに長い形を嫌ふ人もあるやうだが、自分はあれでも宜いと思つてゐる。しかし、前記の大熊、センタウル、アルゴ船などは、餘りに皆大き過ぎて、“何とか改良の餘地は無いものか!?”とさへ考へることがある。これ等の大星座は、その各個が一つの星座と言ふよりも、むしろ其れぞれ一つの“天空”であつてこの中に更に幾つかの“星座らしい”恰好の星座が作られて然るべきものだ

さへ思ふ。卒直に言へば、牧夫座や、ペガソス座や、射手座、獅子座などもチト大き過ぎると思ふのだが、しかし、慣れて見ると、此等の星座には何等かの纏まりがあるから、ガマンの出来ない事は無い。ところが、乙女、水瓶、牛、アンドロメダ、ヘルクレス、鯨などは、大きさは最大級のものでないと言つても、その形には何の纏まりも無い、實に散漫たるもので、昔のギリシヤ人の審美眼を疑ひたくなるやうなものである。之には、バビロンからの傳説とか、ギリシヤ神話への執着とか、黄道を十二座に分たなければならない捕はれた思想とか、いろんなものが原因となつてゐるのであらうが、何れにしても、これ等の星座（まだ、ほかにもある）は傑作とは言へない。

何ものにも捕はれずに、只、吾々の有つて生れた美意識にのみよつて、星座の美醜を考へて見ると、獅子や、蛇使ひの如き特別な場合を除いては、まづ比較的形の小さいものの方が美的である。これは、野尻氏などの書物によつて我が日本の星座を眺めて見ると宜い。我が日本では、オリオンの全星座を、一つのものと思ふので、例へば、あの中央部の“三つ星”や、或は附近の星々のみを“櫛星”だとか、何とか呼んでゐるし、又、蝎座の一連の星列さへ、全體を一つのものと思ふので、ア、シ、タの三つだけを“あきんど星”と呼び、又北斗の七星のうちのガ星からゼ星までを“舟星”と呼んでゐる。支那の星座でも、カシオペアの五つの星を、二分して“王良”と“閼道”にしてゐる。只、北冠、烏、プレヤデス、海豚などの形だけは、西洋でも、東洋でも、之れを分割しようとしなくて、あのまゝの形を良いものとして、適當な名を與へてゐるのを見ると、どうも、眼に見て、“良い”と思はれる形は、皆、 5° から 10° 以内のものである。かういふ風な考へで見直すと、ギリシヤ星座といふものは、大ていいかの神話に捕はれ過ぎてゐる。もつと露骨に言へば、ギリシヤ神話の主題の数が少な過ぎて、二千年の昔から、ホンの主要な（光りの強い）星々を採り上げたに止まり、天の全體としては“形外星”(*αμορφοστοι*)が實に夥しいことになつてゐる。こんなわけだから、中世以來、否、むしろ近代に至つて（南天の空に、新しい星座がテオドールスや、ホンデウス等によつて作られると共に）、ラカイユ、ラランド、ボイデ等の人々が、恐る々々新星座を發明したのであるが、しかし、トレミ傳來の星座には成るべく手を付けずにして、尊敬したがために、トレミ星座は、最初に大きく作られたまゝ、今も尚、大きい形として存在してゐるのであつて、西洋でも、東洋でも、誰一人まだ之れを“大き過ぎるぞ”と、卒直に批評する者はないのである。ところが、自由な立場にある我々日本人の眼で見ると、西洋人の全く知らない支那の三百星座といふものが、天の全體を縦横に切り刻んで、ギリシヤ神話などに捕はれない全く違つた考へから、思ふ存分に星の配列を取り扱つてゐるのであつて、前後二三

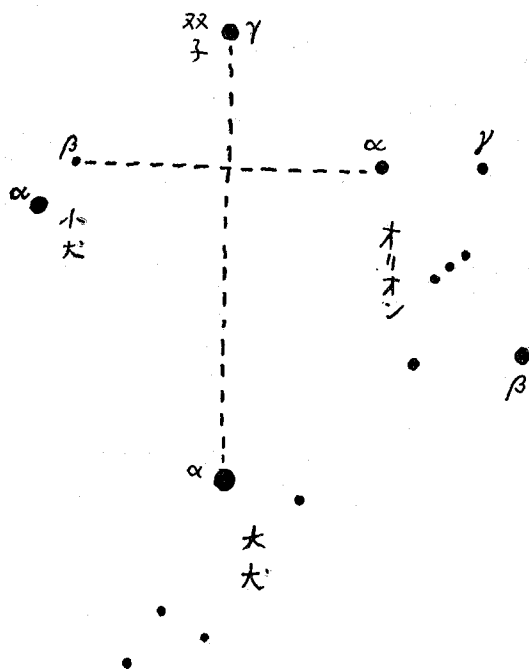
千年にわたり、どしどし“良い”と思ふ星象を増して來たのである。勿論、ギリシャ以來の西洋人の“良い”と思ふ眼と、支那の人々が“良い”と考へた眼とは、イデオロギが違ふから、同じ標準で之れを比較し批判することは出来ないけれど、少なくとも、一つの點に於いて、——即ち“星座”の大きさ、或は、擴がりといふ點に於いて、ギリシャの方では、實に大きい形を其のまゝにして今日に傳へて來てゐるのに對し、支那の方では、ウンと小刻みに區分して了つてゐる點は、何と言つても、ギリシャ式の區分法に對して、暗黙のうちに、“あれでは、大き過ぎて、ダメじゃないか！”と、一大抗議を提出してゐるかの如くである。但し、支那の方にも、天の區分の大きいものは幾つかある。例へば“紫微垣”だとか、“太微垣”だとか、“天市垣”だとか、或は黃道の全周を四分した“蒼龍”だとか、“靈龜”だとか言つたものがあるが（天界 232 及び 234 参照）、あんなのは、嚴密な意味に於いては“星座”以上のものであつて、前記の如く、むしろ“天空”なのである。

話が、又々別の意味に於いて行き過ぎた觀があるが、とにかく、西洋の星座は、一般に、これを楽しむのには、形が不自然に大き過ぎるといふ意味を、自分は言ひたいのである。——さて、かうした見地から見ると、かの有名な南天の“十字架”の星座は、決して大き過ぎるものでなしに、ちょうど、眼を勞うせず、心を散漫にせず、何時までも飽きさせない美形として、人々を惹きつける魅力のあるものである（この星座と共に、鳥座や、北冠座や、蟹座や、海豚座や、琴座なども美しいし、又、カシオペア、三角、南三角なども美しい）。

何と言つても、天空は廣いのであるから、机上の星圖では非常に小さい形でも、空に於いては、餘りに其れが小さ過ぎず、吾々を、満足せしめるものがある。プレヤデスなどは其の一好例である。

尙、星座の美しさの一要素として、星の光度にも、いろいろと述べなければならぬ條件がある。長谷川氏や、秋澤氏の見た新十字形の中には、光度の弱い星が幾らかあるが、これは是非考へ直さなければならぬ。この點に於いて、南天の“十字架”は、一等星が2つ、二等星が2つもあるのであるから、やはりこの意味に於いても、他に比類の無い立派な星座と言はなければならぬ。

秋澤氏の新十字形は、なるほど十字形としての幾何學的な形としては良いけれど、附近のプロシオン星や、オリオン座の明るい星々が眼ざはりになつてゐるやうに思はれる。南天の“十字架”を實際に見ると、明らかな如く、この星座の形は、幾何學的には少々歪んでゐる。しかし、その歪み方が、大變面白くて、恰も十字形を斜めの方向から見てゐる如く、一種の立體的な深みを感じさせることは、實に興味があると、自分は平生から考へてゐる。かうした味はひ方もあるのだから、星の配列が是非正しい十字形でなければならぬ必要は無い。



秋澤昭二郎氏(高知)の十字形(昭和18年4月9日)

のである。カシオペヤ座の W 形を作つてゐる五つの星が、一端から他端へ少しく光度が小さくなつてゐるのなども、同様に面白いと思ふ。之に対して、オリオン座の“三つ星”の光度が、皆殆んど同じであるのは、甚だ平面的な感じを與へてゐる。

話は少しく外れるが、秋澤氏の十字形のあたりには、三つの一等星、即ちプロシオン、ベテルギウス、シリウスの3星が殆んど正確に正三角形を作つてゐる。これは外國人にも古くから知られてゐる有名な星象である。

又、アルデバラン、ベテルギウス、リーゲル、シリウス、カノプスの五つの一等星は、極めて巨大な W 形を作つてゐる。何れも初めての人には、特に興味深いものである。更に、夏の空には、アルタイルと、エーガと、デネブの三星と、北極星とは、菱形を作つてゐて、これは北斗の見えない頃、北極を捜す方便にもなる。しかし、これ等のいろいろの形は、光度から言へば、申し分は無いものだけれど、形が皆餘りに大きく擴がり過ぎてゐるため、之れを一望の下に眼底に眺めて見ることが不便であるのが、缺點である。やはり、前に繰り返し述べた如く全體の形が小さいといふことが必要である。(1943-4-20)

天界正誤表

	誤	正
第262號	第133頁, 14行目 第143頁, 黒點表, 觀測者名	Photometry 吉田昭三
第263號	第148頁, 18行目 第167頁, 5行目 第170頁, 時刻ノ欄, 5行目 " , " , 13行目	純率な “天果” Jau. Abril
	第171頁, 第1822號輻射點, 備考	純粹な “天界” Jan. April Monocerotid